

## 「アブラハムと三人の客人」（創世記一八・一〜一六）

### 1 み言葉に従って

今日から、アブラハムに戻ります。  
一ヶ月ばかり間が空きましたので、これまでのアブラハムの歩みをはじめに振り返っておきます。

アブラハム、彼は、実在の、歴史上の人物で間違いありません。イエスラエル民族の歴史の始まりに位置する人です。父祖です。（一族を率いた長として）族長という呼ばれ方もしています。

聖書が、ほかでもないアブラハムをイスラエルの父祖とするのは、何よりも、今日までイスラエル民族が住んでいる地域、そこに最初に住むようになったのが、アブラハムだからです。

しかし、ご存じのように、その地、カナンと呼ばれるその地に来たのは、彼が自分が選んでそこに移ってきたではありません。主なる神の命令によります。命令に従ってやってきたのです。

カナンでの新たな人生の歩みを開始させた神の言葉、アブラハムの人生で、おそろくもつとも重要な言葉を、再確認しておきます。

主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める。祝福の源となるように。あなたを祝福する人をわたしは祝福し、あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて、あなたによって祝福に入る」（一一・一〜三）。

アブラハムがこの託宣を受けたのは七五歳のときでした。確かにこの神の言葉との出会いが、新たな人生へと彼を導いたのです。この言葉によって、自分のこれからの生きる意味が明らかにされたのです。

この中で語られているのは、アブラハム自身が祝福されるだけではない、彼が祝福されることによって諸国民が神の祝福にあずかり、全世界に祝福がもたらされることになる、これが彼の生きる意味、使命です。ともあれ彼自身、まずもって祝福にあずかります。

祝福とは、神から与えられる幸福や繁栄のことです。旧約聖書で祝福は、霊的といふよりもっと物質的です。子孫が繁栄し、家畜など、財産が増すこと、アブラハムの場合はさらに土地の取得、その土地が子孫に相続されること、それも入ります。もちろん今日祝福を、こうしたこの世的な幸福や繁栄としてだけ理解することは正しいことではありません。むしろ神がどんな時でも共にいてくださること、どんな時も自分が神のものであること、その深い霊的な恵みの確信、キリスト信仰において与えられる祝福とはそのようなものです。アブラハムはいま祝福への途を確実に歩んでいるように見えます（一四章）。

ただ唯一の気がかり、そしてそれが年を追う毎に重いものとなっていったことは想

像に難くありませんが、それはアブラハムとサラ、二人の間に子供が生まれなかったことです。「大いなる国民」となるという約束も、諸民族の「祝福の源」となることも自分を継ぐ人がいて実現されるものです。

サラが不妊であること、これははじめから分かっていた（一一・三〇）。二人は可能な、許される方法で、跡継ぎを得ようとします。最初は、家で生まれた奴隷を養子とし、跡継ぎにしようとし（一五章）。しかしそれは御心になわなないことが明らかになります。そこで、妻サラの提案によって、ハガルというサラの召し使いを使って子供を得ようとします。果たして子供が生まれます（一六章）。この子供がイシュマエルです。

イシュマエルも、母親はハガルですが、アブラハムの子であることは確かです。サラにつらく当たられ、ハガルがイシュマエルを連れて家出する、逃げ出すなど、落ち着くまで、いろいろあつたけれど、神の約束、計画はこれで実現されるとアブラハムは考えていたようです（一七・一八）。

しかしそれも神のみ心でないことが、その一三年後、アブラハム九九歳のときに明らかになります。それが創世記第十七章です。神がアブラハムに現れます。そこで神は改めてアブラハムを諸国民の父、祝福の源とすると語ります。約束は変わらないのです。その上で、神は、妻サラによって子供を与えると約束します。イサクという名前まで与えられます。アブラハムが神の前にひれ伏しながらも、つい笑ってしまったことから名前は由来したものです。

## 2 三人の客人

先々月、七月まで、私どもが聖書から聞いてきたのは、ここまでです。そして今日の箇所は、その続き、第一八章の前半です。

ここまでアブラハムの信仰の歩みを辿ってきて、印象深く残っているのは、これがアブラハムという人かな、と思わされるのは、彼が神と本当に近い関係に生きているということ（相手は神なので、互いにはおかしいかも知れませんが）信頼で結ばれていることです。

そのような関係の中で神は、語りかけ、約束し、命じます。幻の中でも語りかけます。しかしその中には、神が怒った、叱責したというのが見当たりません。それも目立ったことです。いずれにしても、その時々には現れてくださったことが、アブラハムの人生を彩っています（一二・七、一七・一）。その中で妻の不妊は分かっていますが、何度も子を与えると神は約束します。アブラハムも従順です。そうはおっしゃいますけどと言いたくなるような時でも、従います。その信頼は深いのです。こうした神とのコミュニケーション、表面的なものではなく、心の深いところでのやりとり、霊という言葉はアブラハム物語には出てきませんが、み霊による主なる神との交わり、それによってその人格はつくり上げられたように見えます。こうしたものが、アブラハムをイスラエルの父祖とし、また私どもの信仰の父たらしめているものです。

今日の箇所、一八章も、「三人の人」が突然現れアブラハムを訪ねたという、きわめて印象深い内容ですが、じつは主なる神がアブラハムに現れた、顕現物語の一つです。最初の二節をお読みします。

主は、マムレの櫛の木の所で、アブラハムに現れた。暑い真昼に、アブラハムは天幕の入り口に座っていた。目を上げて見ると、三人の人が彼に向かって立っていた。アブラハムはすぐに天幕の入り口から走り出て迎え、地にひれ伏して（一〇二節）。

この最初の言葉から、三人の客人という姿で現れたのは、まさに主なる神であったことは明らかです。

三人の客、これをもう少し詳しく言えば、「彼らの一人」がイサクの誕生の予告をアブラハムにしているので（一〇、二二節）、これは神ご自身と言ってよいと思いません。残りの二人は、一九章一節を見ると「二人の御使い」とありますので、神ではなく、御使いということになります。

もちろんアブラハムは彼らが主なる神の一行だということは知りません。知らないまま、しかし当時の習慣にしたがって、じつに手厚く、へりくだって（八節）、見知らぬ旅人をもてなしています（ヘブライ一三・二）。

こういう習慣は世界のいたるところに残っているようです。日本語で「客」を「まろろ」と読ませます。「まれびと」「稀に来る人」、見知らぬ世界から来る人をもてなし、禍を回避し福を呼び込むという考えがあります。それも関係しているかも知れません。しかしなぜ神はここで今までにない現れ方をしたのか、そういう問いは残ります。

神が現れるというところで、いま新約のいくつかの聖句が浮かびます。一つは、ヨハネ黙示録です。「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事し、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう」（三・二〇）。

もう一つは、マタイ二五章にあるイエスの譬えです（二五・三一〜四〇）。最後の審判で、キリストとは知らずに、困っている人、弱っている人、小さい人を助けた人が、救われるという話です。あの中にも、旅をしていた人に宿を貸したことが、挙げられています。救われた人は、キリストとは知らずにそうしたのです。こういうみ言葉を思い起こすと、神が人の近くにまで、私どものところに来て下さることが分かります（ヨハネ一四・二三）。

そう考えれば、主なる神がここで訪問者という姿でアブラハムに現れたことは不思議ではありません。信頼に満ちた関係の中で神は来てくださったのです。

アブラハムは、神の人をもてなし、見事なまでに、祝福の担い手にふさわしいことを証しました。いま改めて彼に祝福の基となることが託されます。「わたしは来年の今ごろ、必ずここにまた来ますが、そのころには、あなたの妻のサラに男の子が生まれています」。神のみ告げに、かつて笑ってしまったアブラハムは、もうここにはいないのです。

### 3 笑い

三人の訪問者の目的は、はっきりしています。イサクが生まれることをアブラハムに伝え、サラにもはっきり伝えるようにすることです。

振り返って見ると、ここまでのところ、イサク誕生の予告は、アブラハムにはなさ

れたけれど（一七・一六）、サラには告げられていません。アブラハムも妻サラに話してはいなかったのでしょうか。そしてここでもサラには、直接には伝えられてはいません。サラは、訪問者の一人がアブラハムに語った言葉を、漏れ聞くという形になっています（九〇節）。そしてそれを耳にしたとき、アブラハムがそうであったように彼女も、笑ったのです。

サラはひそかに笑った。自分は年をとり、もはや楽しみがあるはずもなし、主人も年老いているのに、と思っただのである（一二節）。

アブラハムが、妻サラから子供が生まれる、イサクが生まれると神の託宣を聞いたとき、彼も笑ったことを私どもは知っています（一七・一七）。しかしアブラハムが笑った時と違って、サラはその笑いをとがめられています。

主はアブラハムに言われた。「なぜサラは笑ったのか。なぜ年をとった自分に子供が生まれるはずがないと思ったのだ。主に不可能なことがあるか。来年の今ごろ、わたしはここに戻ってくる。そのころ、サラには必ず男の子が生まれてくる」。サラは恐ろしくなり、打ち消して言った。「わたしは笑いませんでした」。主は言われた。「いや、あなたは確かに笑った」（一三〜一五節）。

アブラハムも笑った、サラも笑った、しかしその笑いは、少なくともそれに対面していた主なる神にとつて、一方は信仰における笑い、他方は不信仰の笑いであったのです。

笑いそのものに罪はない。しかし神は、その心を見抜いておられます。「主に不可能なことなどない」。その通りと確信して笑うのと、そうかなと疑って笑うのとでは違うのです。

使徒パウロの言葉をここでも参考にすべきです。パウロは、この事態を、こう語っていたのです。「そのころ彼は、およそ百歳になっていて、既に自分の体が衰えており、そして妻サラの体も子を宿せないと知りながらも、その信仰が弱まりはしませんでした」（ローマ四・一九）。「主に不可能なことなどない」という信仰をアブラハムはなくしていなかったのです。しかしサラには、「主に不可能なことなどない」とは見えませんでした。不可能に見えたのです。それゆえ笑ったのです。

アブラハムは違っていました。人間的には不可能、それは知っています。しかしそれが全部だとは考えていません。それが絶対だとも考えていません。不可能だという判断に支配されていません。自分の認識（「子を宿せないと知りながらも」）から距離があります。余裕があります。それは、もう一つ別の現実から、すなわち、神の現実から事態を見ているからです。それを知らずに、人間的な事態に右往左往しているなら、それこそ神の目から見たら笑うべきことではないでしょうか。この笑いをアブラハムは知っていたのです。「主に不可能なことなどない」、この神の究極の現実に自らをかけたとき、人は人間的な現実のあれやこれやから解き放たれ、本当に自由に生きて生きることができるのです。